類義語「やっと」「ようやく」の文体と共起する述語について
―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「文学」を用いて―

趙　恩英

1. はじめに

本稿は、「ある事態の実現に長い時間がかかる」ことを共通点とする類義語「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」の中で、文末に否定形式が来ず、＜話し手が望ましいと思っている事態（状態）が困難を乗り越えた末に実現する＞ことを表す「やっと」「ようやく」の相違について検討したものである。両副詞について『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以後、BCCWJ と称する）を用い、さまざまなジャンルでの出現傾向から文体の差を検討する[1]。また、「書籍」と「ベストセラー」の下位区分の一つである「文学」に現れる両副詞の含まれる文を取り出し、両副詞と共起する述語の意味分布の特徴から両副詞の違いを検討する[2]。

これまで、「やっと」「ようやく」に関する先行研究は意味からの検討が主になされてきたが、大量の用例を用い、共起する述語を中心に両副詞の相違を明らかにしたものは管見の限りない。

本稿では、「やっと」「ようやく」について、ジャンルによる出現傾向から文体の差や、「文学」において両副詞と共起する述語を検討し、両副詞の違いを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

「やっと」「ようやく」について、工藤(1985)は、「時の副詞」とし、「基準時から動作や変化の起こるまでの時間量が極大を表す」ことを共通点とする類義語だと定義し、大里(1986)は、＜話し手が望ましいと思っている事態(状態)が困難を乗り越えた末に実現する＞ことを表すと述べている。また、グループ・ジャマシイ(1998)では、「やっと」について、期待の実現とぎりぎりの状態に分類し、「ようやく」について、長い時間がかかったり、途中でいろいろなことがあった後、事態に変化が起きたり、話し手

---

1 本稿での「ジャンル」とは、BCCWJ における「サブコーパス」の「書籍」「ベストセラー」「新聞」「雑誌」「白書」「国会会議録」「教科書」「知恵袋」「応報誌」「韻文」「法律」「ブログ」のことである。また、本稿での文体とは、『国語学大辞典』(pp. 766-767)における「文体」の項目の定義に従う。「文体」の種類は、大きく「類型的文体」と「個性的文体」に分かれ、「類型的文体」には、「(1)記載形式から。漢文体、宣命体など。(2)語彙・語法から。和文体・漢文訓読体など。また、文語体・口語体など。(3)修辞上から。散文体・韻文体など。(4)文章のジャンルの上から。日記文体・書簡文体など。また、論説の文体、随筆の文体、小説の文体など」がある。本稿では「類型的文体」の(4)の定義に従い、ジャンルの区別を「文体」とする。

2 「書籍」と「ベストセラー」の下位区分の一つである「文学」とは、「書籍」「ベストセラー」に入る「総記、哲学、歴史、社会科学、自然科学、技術・工学、産業、芸術・美術、言語、文学、分類なし」というさまざまなジャンルの中の「文学」のことである。

の予想や期待が実現した場合に使い、また、時間や労力をかけて実現する様子を表す場合に使うとしている。これは文型辞典であるため、「やっと」「ようやく」の現れ方について分類はされているものの、両副詞の相違は明確に示されていない。さらに、仁田(2002)は、「時間関係の副詞」の〈長期所要型〉とし、事態が長期の時間的経過を経て起動し実現したと捉えられていることを表すと述べている。これらの先行研究は、実際の用例を用い両副詞の相違を明らかにすることよりは両副詞の持つ共通の意味について叙述するに留まっている。

また、実際の用例を用いた研究として、ルチラ(2005)と金(2006)がある。ルチラ(2005)は、「やっと」は、出来事が困難を乗り越えて(・かろうじて)実現したことに重点を置き、「ようやく」は、実現までの経過に重点を置きながら、それに時間がかかったことを表し、期待の実現を表す場合、「やっと」は「会話文」などに多く現れていると述べている。しかし、ルチラ(2005)の研究は、考察対象をシタ形式の述語に限定し、データとして小説、随筆、シナリオなど30作品から網羅的に収集したとしているが、対象になった用例の数は明確に示されていない。また、「やっと」は「会話文」などに多く現れるとしているが、どの位多いのかその数値は示されていない。

金(2006)は、主体側に重点が置かれた場合と対象側に重点が置かれた場合における両副詞の相違点を明らかにし、「ようやく」は改まった言い方で文章的であり、「やっと」は口語的であると述べている。しかし、金(2006)は、「聞蔵」(2003年1月1日〜2005年10月30日)と、「青空文庫」からの二作品を調査対象にしたが、「聞蔵」には、新聞、雑誌、週刊誌が含まれており、ジャンルを区分して検討したのかどうかについて言及されておらず、用例の詳細な数値も欠如している。また、「やっと」が口語的、「ようやく」が文章的であることの根拠が示されていない。

このように、「やっと」は口語的で「会話文」に多く現れ、「ようやく」は文章的であると言われているが、両副詞がジャンルごとにどう現われているか、ジャンル毎にどのような出現傾向にあるか、また、その出現傾向を数値的に示しているものも見当たらない。「やっと」が口語に使われてきたことは、歴史的な観点での検討を行った濱田(1984)の指摘からでも読み取れる。濱田(1984)は、「やうやう」から「やっと」への変化について、「「ややく」乃至「やくやく」から出、「やうやく」を経て、平安朝中期前後に「やうやう」の形をとり、漢字ならば「漸」「徐」などで表される様な意味を本来有していたこの語が、一つにはその用いられる文脈から、また一つには「やはら(やをら)」などの同義語との争いに敗れて、更には同音異義語たる「様々」の音読との混淆という、少なくとも三つの理由によって、平安朝末から中世初期頃にかけて、口語においては現代語のヨーヤク(ヨーヨー)、ヤットと略々同じ意味でも用いられはじめ、遅くとも中世末期頃には、この意味変化が略々完成したものと考えられる。ついで江戸時代に入り、主として江戸で用いられたヨーヤクという形が格助詞「と」を伴って第四音節が促音化し、更にそれが幾つかの理由によって後半部のみが独立してヤットという同義語を発生せしめるに至り、むしろ関東方言ではその方がヨーヤクよりも勢力を得て現代語に至る。(濱田1984:p.212)」と述べている。濱田(1984)の記述から、

「やっと」の成立は「ようやく」からであり、「やっと」は口語であることが読み取れる。

以上のように、「やっと」「ようやく」の先行研究における大きな問題点は、分析対象のデータの扱いにあると思われる。伊藤(2003:p.26)は、「いくら高度な統計手法をつかっても、処理対象となる素材(コーパス)が不正確であれば、出てくるデータも不正確にならざるをえないからである」と述べているが、先行研究では検討対象であるコーパスの詳細と用例の数が明確でないため、その研究結果に信頼性と再現性の面で再検討の余地があると思われる。それで、計量的な手法で出現傾向を明らかにし、そこから意味の検討を行う。その中で「やっと」「ようやく」は、どのような述語と共起するかその傾向を明らかになる。

また、他の類義語と異なり、その語源が同じであると考えられる「やっと」「ようやく」は、現れる形式、共起する述語など似ている可能性が高いと予想されるが、両者の違いは、どんな点に現れるのか疑問である。

そこで、本稿では、「やっと」「ようやく」について、ジャンルによる出現傾向から文体の差を検討する。次に、「書籍」と「ベストセラー」の下位区分である「文学」における両副詞と共起する高頻度の述語と低頻度の述語を意味分類し、その意味分布から両副詞の相違を明らかにする。筆者が検討対象として「文学」を選んだのは、日本語の実態が見られる最適な調査対象は、さまざまな表現が含まれる「小説」と幅広く読まれる「新聞」だと考えているためである。本稿では「小説」に相当する「文学」を用い、別稿で「新聞」を対象に検討する。

3. 調査データと研究方法

3.1 調査データについて

調査データは、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いる。用例は、オンライン上の『中納言』から抽出し、用例の検索は、短単位で行った。「検索対象」は、「出版・書籍コア」「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・ベストセラー」に限定した。抽出結果にはデータの重複の可能性があるため、「文学」の用例は、抽出された用例全てに目を通し、重複がないことを確認した[3]。

また、違うジャンルでの出現傾向を通し、文体の差を見るため、「出版・新聞(コア)」「出版・雑誌(コア)」「特定目的・白書(コア)」「特定目的・知恵袋(コア)」「特定目的・ブログ(コア)」「特定目的・法律」「特定目的・国会会議録」「特定目的・広報誌」「特定目的・教科書」「特定目的・韻文」からも用例をジャンルごとに抽出した。

検索の際、「やっと」は、「やっと」「ヤット」「漸と」を、「ようやく」の場合、「ようやく」「ヨウヤク」「漸く」「漸やく」「やうやく」をキーワードにした。抽出された用例は、「書籍」では、「やっと」が3258例、「ヤット」が11例、「漸と」が3例、「よ

3 田野村(2012:p.4)は、データの重複について、Yahoo!ブログサブコーパスと法律サブコーパスにデータの重複が多いと述べている。

うやく」が 3860 例、「漸く」が 192 例、「やうやく」が 9 例、「ヨウヤク、漸やく」が 0 例であった。「ベストセラー」では、「やっと」が 292 例、「ヤット、漸と」が 0 例、「ようやく」が 302 例、「漸く」が 7 例、「やうやく」が 3 例、「ヨウヤク、漸やく」が 0 例であった。これらの中で、ジャンルが「文学」のものは、「やっと」が 1912 例、「ようやく」が 2391 例であった。「やっと」の用例の中には、(1)のように、不適切なものが 12 例現れた。

(1)もちろん、美術史の勉強はするよ。でも大変なんだもん。アジア美術に進む前に、西洋美術を全部やっとかないといけないのよね。好きでもない芸術家の名前も全部覚えなきゃいけないし。(LBt9_00116『匂いたつ官能の都』2005)

このような不適切なものと「やっとのことで」「やっとの思いで」など、また、「～やっとだ。」「～ようやくだ。」「ようやくにして」などを除き、「やっと」1579 例、「ようやく」2329 例を検討対象にした[4]。

3.2　研究方法について

抽出された用例から両副詞と共起する述語を目で確認した。共起する述語の認定に疑問があった場合、例えば(2)のように、連体節を含む文で、「やっと」と共起する述語が「開く」と「聞く」と認定できる可能性がある場合、京都大学の黒橋・河原研究室の「KNP」を使ってその構文解析の結果を参考にし、この場合、「開く」と認定した[5]。

(2)二階にもどったケリーは、四十五分ほどたったころやっと玄関のドアが開く音を聞いた。(PB59_00363『クリスマス・ボックス』2005)[6]

さらに、共起する述語が複合動詞の場合、形態素解析をした後で、述語を目で確認し認定した[7]。例えば、「書き出す」を形態素解析すると、「書く」は「連用形」に、「出す」は「基本形」に解析される。この場合、「連用形」の「書く」を述語として認定した。また、「起き直る」の場合、「起き直る」に解析されるため、このまま述語として認定しカウントした。

次に、両副詞と共起する高頻度と低頻度の述語を検討し、その相違を明確にする。低頻度を検討する理由は、趙(2012:p.89)で述べたように「やっと」「ようやく」と共

4「金(2005:p.33)は、構文的に「～するのがやっとだ」のように、「やっと」は述語になるが、「ようやく」はその用法がないと述べている。しかし、「文学」には、「信子の部屋が出来て、狭く外にはみ出した恰好になった書斎は、洋之介の大きめの座蒲団をおくのがようやくであった。(OB1X_00294『蕁麻の家』1976)」のような用例が抽出された。

5「KNP」について、ホームページでは、「日本語文の構文・格解析を行うシステムです．形態素解析システム JUMAN の解析結果(形態素列)を入力とし，文節および基本句間の係り受け関係，格関係を出力します．係り受け関係，格関係は，Web から自動構築した大規模格フレームに基づく確率的構文・格解析により決定します」と述べている。http://nlp.ist.i.kyoto-u.ac.jp/index.php?KNP

6 用例の出典は、「サンプル ID、書名、出版年」順に書く。

7 形態素解析は、「ChaSen (茶筅)」で行った。ChaSen は、奈良先端科学技術大学院大学松本研究室で開発されたコスト最小法による日本語形態素解析システムである(山下(1998))。「ChaSen」の形態素解析は、「IPADIC」という電子化辞書が形態論情報を付与する。

起する高頻度の述語というのは、「やっと」「ようやく」とよく共起するものであると同時に、その他の（両副詞が出現しない）文においてもよく使われる（元々使用頻度の高い）述語である可能性があるためである。「やっと」「ようやく」と共起する述語の相違を見るためには、一般的に多く使われる頻度の高い述語を除き、両副詞と共起する特徴的な述語を抽出する必要がある。よく使われる頻度の高い動詞を除いた両副詞と共起するそれぞれの低頻度の述語を「特徴的な動詞」とする。「特徴的な動詞」という用語は、田中(1978)の「特徴語」の概念から借りた用語である。

低頻度の「特徴的な動詞」の抽出は、伊藤(2008、2009)の「量的語彙構造分析法」(以下、「分析法」)において、時代範囲を列にとり、使用度数を行にとる「(使用)範囲・度数分布表」を参考にする。「分析法」は、伊藤(2008:p. 114)が言及しているように、林(1971)の「基本語彙選定法」(以下、「選定法」)から想を得て、それを構造史の分析のために改訂したものである。「分析法」は、語彙区分の基準として語彙素の使用度数と使用範囲を採用しているが、「選定法」との違いは「使用範囲の内容」と「使用度数の算出法」にあると述べている。

本稿では、「分析法」の「使用度数の算出法」を採用するが、史的な検討と語彙調査ではないため、「使用範囲の内容」が異なる。「使用範囲の内容」において、「選定法」では、新聞記事の話題分野という同時代のジャンルの違いであり、「分析法」では、表1のように、上代、中古、中世という時代の違いである。

本稿における「使用範囲の内容」とは、同じジャンル「文学」という狭い範囲であるが、二つの類義語と共起する述語を対象にすることに大きな違いがある。つまり、一つのジャンルにおける類義語と共起する動詞を調査対象とする点に違いがある。

表1 上代語彙の範囲・度数分布表

延べ語数＼範囲列			広範囲	中範囲	狭範囲	異なり語数		
頻度層	度数	累積比率(%)	三時代共通語彙	上代・中古共通語彙	上代固有語彙	合計	比率(%)	累積比率(%)
高頻度	970～28	0.0～59.8	276	26	16	318	4.9	4.9
中頻度	27～2	～93.5	1143	371	1427	2941	45.2	50.1
低頻度	1	～100.0	568	251	2427	3246	49.9	100.0
合計	50070		1987	648	3870	6505	100.0	

(伊藤(2009：p. 189の表6. 11そのまま引用)

また、「使用度数の算出法」から得られる低頻度の「特徴的な動詞」は、趙(2012)で試みた低頻度の「特徴語」から類義語の相違を分析した方法とその想は同様である。表1の網掛け部分は、各範囲列の中心区画を表し、広範囲列では「基本語彙」、中範囲列では「一般語彙」、狭範囲列では「特徴語彙」のことである。

本稿での「やっと」「ようやく」と共起する「特徴的な動詞」は、「分析法」により分けられる表1の狭範囲列の網掛け部分である「特徴語彙」に当たる。

次に、低頻度の「特徴的な動詞」として抽出されたものを『分類語彙表　増補改訂

版』(2004)により意味分類をし、その意味分布から「やっと」「ようやく」の違いを明らかにする。

4. 結果と考察

4.1 「やっと」「ようやく」のジャンルごとの出現頻度と文体の差

BCCWJ にはさまざまなサブコーパスがあるため、「やっと」「ようやく」のジャンルでの出現傾向が検討できる。表 2 は、BCCWJ のさまざまなジャンルでの「やっと」「ようやく」の出現傾向をまとめたものである。

表 2　ジャンル別の出現傾向

サブコーパス	やっと		ようやく	
	頻度	比率	頻度	比率
書籍	3272	59.3%	4061	70.9%
ベストセラー	292	5.3%	312	5.4%
新聞	39	0.7%	43	0.8%
雑誌	132	2.4%	200	3.5%
白書	4	0.1%	47	0.8%
国会会議録	58	1.1%	89	1.6%
教科書	13	0.2%	22	0.4%
知恵袋	377	6.8%	107	1.9%
広報誌	11	0.2%	12	0.2%
韻文	10	0.2%	21	0.4%
法律	0	0.0%	0	0.0%
ブログ	1307	23.7%	813	14.2%
総計	5515	100.0%	5272	100.0%

ジャンル別に、「やっと」「ようやく」の比率を比べてみると、「やっと」は、「知恵袋」と「ブログ」に多く出現し、「ようやく」は、それら以外のジャンルにやや多く出現する。特に、「知恵袋」における「やっと」は、「ようやく」の約 3 倍以上高い比率である。

一方、「ようやく」は、出現頻度は低いものの、「白書」において、「やっと」より高い比率であり、「教科書」では、「やっと」より高い比率である。「ベストセラー」「新聞」での出現頻度は、「やっと」より「ようやく」の方がやや高いものの、比率に大きな違いは見られない[8]。

このように、「やっと」「ようやく」は、ジャンルによりその出現傾向に差が出る副詞であると言える。宮内(2012:p.50)は、「白書」の文体的特徴について、「フォーマル」で「書き言葉的」であり、「知恵袋」は、「フォーマルでない」「話し言葉的」「丁寧」「客観的」であると述べている。「知恵袋」「ブログ」における「やっと」、「白書」「国会会議録」「教科書」における「ようやく」の出現傾向から、改まった文章には「よう

8「書籍」「ベストセラー」には、「文学」をはじめ、さまざまなジャンルが含まれている。また、「新聞」にも違うタイプの記事があるため、出現傾向について改めて検討する必要があると思われる。

やく」が、よりくだけた文章には「やっと」が多く現れることが分かる。

次に、「文学」における「やっと」「ようやく」の「会話文」と「地の文」での出現傾向について検討する。浅川(2012:p. 131)は、「明治 20 年(1887 年)以来、会話文・地の文ともに話しことばのように書く言文一致体の文体は、口語文という日本語の書きことばとして普及し、(省略)現代の日本語においては、その口語文自体が書きことばの一種として受けとられるようになってきており、話しことば(音声言語)と書きことば(文字言語としての文章語)とは再び乖離していく傾向にあると考えられる。口語体で書かれていても、話しことばが文字言語としての書きことばと全く一致するわけではない」と述べている。また、伊藤(2002 : p. 40)は、語彙調査の目的によるが、小説の地の文と会話文の違いのような「文体差」を考慮にいれずに調査を行うと、調査結果の判断を誤ることがあると述べている。

そのため、「やっと」「ようやく」の文体を見るためには、「会話文」と「地の文」を確認する必要があると思われる。「会話文」の認定は、“「”“」”　“『”“』”に囲まれている文の中で、前後の文脈から会話だと認定できるもの、「話す」「語る」「指摘する」などがついている直接引用文、“「”“」”はないが、前後の文脈から会話と判断できるものを「会話文」と認定した。

検討の結果、「会話文」における両副詞の出現は、「やっと」が全体数 1579 例中、310 例(19. 6%)現れ、「ようやく」が全体数 2329 例中、116 例(5. 0%)現れ、「やっと」の出現率が高いことが確認できた。このように、「やっと」「ようやく」の「会話文」での出現傾向から、「やっと」が「ようやく」より話し言葉的であることが言える。

4. 2　「文学」における「やっと」「ようやく」と共起する述語について

ここでは、「やっと」「ようやく」と共起する述語の出現傾向を検討する。表 3 は、「やっと」「ようやく」と共起する述語を出現順位 10 位までまとめたものである。

表 3　共起する高頻度の動詞

やっと				ようやく			
順位	動詞	頻度	比率	順位	動詞	頻度	比率
1	する	155	9.8%	1	する	272	11.7%
2	なる	102	6.5%	2	なる	147	6.3%
3	分かる	82	5.2%	3	できる	92	4.0%
4	できる	69	4.4%	4	開く	66	2.8%
5	出る	50	3.2%	5	分かる	64	2.7%
6	見つける	38	2.4%	6	気づく	58	2.5%
7	言う	36	2.3%	7	付く	51	2.2%
7	付く	36	2.3%	8	出る	48	2.1%
9	気づく	35	2.2%	9	言う	41	1.8%
10	開く	32	2.0%	10	たどりつく	40	1.7%

表 3 から、出現頻度の高い動詞は、「やっと」「ようやく」ともに 1 位が「する」、2 位が「なる」で 10 位以内に入る共通の動詞は、「分かる」「できる」「出る」「言う」「付

く」「開く」「気づく」である。「する」「言う」以外は状態の変化を表すものが多く、共起する高頻度の動詞は非常に似ていることが分かる。

このことから、「やっと」「ようやく」は、共起する高頻度の動詞からその違いを見出すことは難しい類義語であることが言える。ここで興味深いのは、「ようやく」において、10位である「たどりつく」という動詞との共起である。「たどりつく」は、「やっと」では21例現れ、出現順位が14位であるため、表2に入らない。「やっと」と共起する「たどりつく」は、(3)のように、空間的な場所に「たどりつく」ことのみであるが、「ようやく」と共起する場合、空間的な場所に「たどりつく」ことも含め、(4)(5)のように、人の話やある記事など空間的場所以外に「たどりつく」ものが見られた。

(3) 家にやっとたどり着くと、チャスしかいなかった。(PB19_00444『間に合わせの花婿』2001)

(4) つまり、おばあちゃんが休みなしにしゃべり、あたしはときどきあいづちをうち、オリバーはかしこそうにだまってほほえんでたってこと。そのうちようやく、パパの話にたどりつき、パパの若いころに話をもっていくことができた。(PB49_00282『アナ=ラウラのタンゴ』2004)

(5) 自分が三歳だった頃の新聞を隅から隅まで読むうちに、加恵子はようやくある記事にたどりついた。(LBr9_00091『鎖』2003)

また、「出る」との共起においては、「やっと」「ようやく」ともに、「声が出る、人が出る、電話に出る、許可が出る」などは共通に現れたが、(6)のように、「言葉が出る」という表現は「ようやく」のみ現れた。

(6) ようやく、相手を納得させそうな言葉が出た。(OB1X_00246『夕暮まで』1978)

「出る」「たどりつく」以外の「できる」「付く」などとの共起には、相違はあまり見られなかったが、「出る」「たどりつく」の用例から、「やっと」より「ようやく」と結びつく名詞(助詞「が」「を」などの前にくる)には、さまざまな種類の名詞が来ることが分かった。

以上のように、共起する高頻度の動詞からは、「やっと」より「ようやく」のほうが、多様な名詞と共起する傾向以外に顕著な違いが見られないため、もっと詳細な検討が必要であろう。

そこで、出現頻度が1位である「する」動詞を検討する。検討の際には『分類語彙表　増補改訂版』を利用し、その意味分布を見る[9]。「する」には、「安心する・到着する」のように、さまざまなサ変動詞と「手にする」「音がする」「さっぱりする」「戻ることにする」「大きくする」「デスクにつこうとする」など性質が違うものが含まれている。サ変動詞以外のものを除き、「する」動詞に前接する語を『分類語彙表　増補改

9 『分類語彙表　増補改訂版』は、分類番号によって表される意味的範疇は、より広い概念から,「類」「部門」「中項目」「分類項目」順となっている。例えば、表4の「抽象的関係／1.12××／存在」場合、①は、「(体の)類」を表し、「抽象的関係」は「部門」を表し、②は「中項目」である「存在」を表し、「××」は「分類項目」を表す。

訂版』で意味分類するとその意味分布は下記の表4のようにまとめられる[10]。

表4　「する」に前接する語

意味分布			やっと 頻度	やっと 比率	ようやく 頻度	ようやく 比率
抽象的関係	1.12××　存在		4	3.0%	11	4.9%
	1.15××　作用		36	26.7%	80	35.9%
	1.16××　時間				1	0.4%
	1.17××　空間				2	0.9%
小計			40	29.6%	94	42.2%
人間活動―精神及び行為	1.30××　心		52	38.5%	66	29.6%
	1.31××　言語		8	5.9%	7	3.1%
	1.33××　生活		3	2.2%	9	4.0%
	1.34××　行為		3	2.2%	1	0.4%
	1.35××　交わり		12	8.9%	20	9.0%
	1.36××　待遇		3	2.2%	3	1.3%
	1.37××　経済		9	6.7%	2	0.9%
	1.38××　事業		1	0.7%	9	4.0%
小計			91	67.4%	117	52.5%
生産物及び用具	1.45××　道具				2	0.9%
小計					2	0.9%
自然物及び自然現象	1.56××　身体				1	0.4%
	1.57××　生命		4	3.0%	9	4.0%
小計			4	3.0%	10	4.5%
総計			135	100.0%	223	100.0%

表4から、「やっと」と「ようやく」と共起する「する」動詞に前接する語は、その比率に大きな差は見られず、数値は少ないものの、「人間活動―精神および行為」（以下、「人間活動」と称する）には、「やっと」が多く、「抽象的関係」「生産物および用具」「自然物及び自然現象」（以下、「自然現象」と称する）には「ようやく」との共起が多く見られた。これらの差が有意な差であるかχ^2検定を行ったところ、$p<.05$で有意性が認められた。

「ようやく」のみ現れたもののうち、(7)のように、「抽象的関係／時間」の「一段落する」と(8)のように、「自然現象／身体」の「成長する」には共通の点が見られる。それらは、時間の経過が含まれている点である。『日本国語大辞典　第二版』（p. 550）の「ようやく」についての意味記述では、「次第に、だんだん、少しずつ」という意味が書かれている。これらの意味は、「ようやく」と類似の関係にあるとは言えなくなったが、「ようやく」には「次第に、だんだん」という意味があると仮定すれば、時間の経過がある動詞との共起が「ようやく」に多いということが理解できる[11]。

10「する」に前接する語で除かれた用例は、「やっと」が20例、「ようやく」が49例である。

11 仁田（2002：p. 241）によると、「次第に、だんだん」は、「時間の中における事態の進展」の副詞のうち、時間の展開に従って進展していく事態の進展のあり様、そして、そのことを通して、事態の進展の時間的あり方を表すもので、「進展様態型」であると述べている。また、仁田（2002：p. 246）は、「や

(7)一夏の忙しさもようやく一段落したころあいになると、いちは納屋の隅からダルマという糸取り機を取出して来て土間に据え、鍋に湯を入れてそのなかに繭を浮かせ、糸を取るのである。(LBo9_00130『仁淀川』(2000))

(8)つまり、発生初期の胚が変化し成長する過程によく似たプロセスが進行中だったのだ。やがてようやく、成長しはじめたその胚は発達過程のあらゆる段階を物すごいスピードで通過した。(LBd9_00133『ザ・ベスト・オブ・ジョン・コリア』1989)

4.3 「特徴的な動詞」からの「やっと」「ようやく」の違いについて

ここでは、伊藤(2008、2009)の「使用度数の算出法」により、低頻度の「特徴的な動詞」を抽出し、その意味分布から類義語の違いを検討する。下記の表5、表6は、「やっと」「ようやく」それぞれの「(使用)範囲・度数分布」をまとめたものである。表5、表6の読み方は、「共通動詞」とは、「やっと」「ようやく」ともに現れる共通の動詞で、「固有動詞」とは、それぞれの副詞のみ現れる動詞である。表5の「固有動詞」は、「やっと」のみ現れる動詞、表6の「固有動詞」は「ようやく」のみ現れる動詞である。伊藤(2008:pp.120-121)は、「どのような語彙表も「高頻度の見出し語は少なく、低頻度の見出し語は多い」という規則性をもっている。(省略)頻度1の見出し語は語彙量の50%前後を占めるのが普通である」と述べており、表5、表6もこの記述に当てはまる結果(「やっと」は55.7%、「ようやく」は53.7%)となった。

表5 「やっと」の「特徴的な動詞」の「(使用)範囲・度数分布表」

	延べ語数		「文学」範囲(補正前)		「文学」範囲(補正後)		異なり語数	
頻度層	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	155～16	0%～49.8%	17		32		32	8.6%
	15～8	～59.8%	15					
中頻度	7～5	～69.2%	25		116	16	132	35.7%
	4～3	～79.6%	42	7				
	2	～87%	49	9				
低頻度	1	～100%	91	115	91	115	206	55.7%
合計	1579		239	131	239	131	370	100.0%

表6 「ようやく」の「特徴的な動詞」の「(使用)範囲・度数分布表」

	延べ語数		「文学」範囲(補正前)		「文学」範囲(補正後)		異なり語数	
頻度層	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	272～19	0%～49.0%	21		40	2	42	8.1%
	18～9	～59.9%	19	2				
中頻度	8～5	～71.5%	41	5	117	82	199	38.3%
	4～3	～79.6%	38	17				
	2	～88.0%	38	60				
低頻度	1	～100%	82	197	82	197	279	53.7%
合計	2329		239	281	239	281	520	100.0%

っと」「ようやく」は、「起動への時間量」を表す副詞として、「長期所要型」と分類している。このように、「ようやく」は、「次第に、だんだん」と類似関係ではないと考えられる。

一方、両副詞の異なり語数の「高頻度」「中頻度」「低頻度」の比率に大きな差は見られなかった。表 5、表 6 から抽出された低頻度の「特徴的な動詞(網掛けの部分)」は、「やっと」が 115 例、「ようやく」が 197 例である。「使用度数の算出法」により抽出された「特徴的な動詞」を『分類語彙表　増補改訂版』をもとに分類した意味分布は、表 7 のようにまとめられる。

表 7　低頻度の特徴的な動詞の意味分布

			やっと		ようやく	
意味分布			頻度	比率	頻度	比率
抽象的関係	2.11 × ×	類	2	1.7%		
	2.12 × ×	存在	4	3.5%	18	9.1%
	2.13 × ×	様相			4	2.0%
	2.14 × ×	力	1	0.9%		
	2.15 × ×	作用	39	33.9%	75	38.1%
	2.16 × ×	時間			2	1.0%
	2.17 × ×	空間	1	0.9%	1	0.5%
小計			47	40.9%	100	50.8%
人間活動—精神及び行為	2.30 × ×	心	15	13.0%	27	13.7%
	2.31 × ×	言語	6	5.2%	13	6.6%
	2.32 × ×	芸術	1	0.9%		
	2.33 × ×	生活	18	15.7%	14	7.1%
	2.34 × ×	行為	2	1.7%	3	1.5%
	2.35 × ×	交わり	3	2.6%	5	2.5%
	2.36 × ×	待遇	3	2.6%	5	2.5%
	2.37 × ×	経済	8	7.0%	10	5.1%
	2.38 × ×	事業	7	6.1%	1	0.5%
小計			63	54.8%	78	39.6%
自然物及び自然現象	2.50 × ×	自然	3	2.6%	4	2.0%
	2.51 × ×	物質	1	0.9%	6	3.0%
	2.57 × ×	生命	1	0.9%	9	4.6%
小計			5	4.3%	19	9.6%
総計			115	100.0%	197	100.0%

表 7 から「人間活動」に「やっと」がやや多く使われ、「抽象的関係」「自然現象」には「ようやく」がやや多く使われていることが分かる。これらの差が有意な差であるか χ^2 検定を行ったところ、$p<.05$ で有意性が認められた。

この結果は、前節の表 4 の「する」動詞に前接する語の意味分布の結果と似ている。高頻度の語の意味分布と、低頻度の語の意味分布が同じ傾向であることはとても興味深い[12]。「人間活動」において、他の項目より「生活」と「事業」の項目に、「やっと」がやや多く現れた。「生活」に現れる動詞は、両副詞に大きな違いは見られなかったが、

12 高頻度の語と低頻度の語の結果の類似性は、今後、他の類義語の相違を明らかにする際、低頻度の「特徴的な動詞」のみを検討するための根拠となるのではないかと思われる。

「事業」に現れる動詞には、「やっと」が「植える、運ぶ、癒す、縫う、盛る、炊きあがる」と共起し、「ようやく」が、「盛り付ける」のみ共起しやや違いが見られた。

次に、「自然物」の「物質」の項目の意味分布を見ると、「ようやく」には、「冷える、照らす、とけあう、たぎる、あたる」などと共起するが、「やっと」には、「吹く」のみ共起した。また、「生命」の項目の意味分布にも「ようやく」には、「ほころびる、熟す、咲く、生き延びる、産まれる、治す」などと共起するものの、「やっと」には、「生き残る」のみ共起した。「生命」に現れる動詞の特徴は、(9)のように、事態が時間の経過を経た結果のものや(10)のように、事態の開始を表すアスペクト表現「〜ハジメル」と結合するものが見られた。

(9) H は、やっと生き残ったような感じで立っている煙突の影を、踏んではいけないような気がして、ピョコンと飛び越えた。(OB5X_00090『少年 H』1997)

(10) 今年は珍しく寒い冬で、大雪が度々あり、梅もなかなか咲かず、寂庵では、三月に入って、ようやく咲きはじめたというありさまであった。(PB29_00206『寂聴生きいき帖』2002)

このように、「自然物」における意味分布から、「ようやく」は「やっと」より、事態に時間の経過を含んでいる動詞と共起する傾向があることが分かる。この時間の経過を含むという点は「抽象的関係」の「作用」の意味分布の詳細からも読み取れる。

下記の表 8 は、「抽象的関係」の「作用」の意味分布を表にまとめたものである。

表 8 から、「ようやく」のみに現れる動詞を見ると、「積む、立ち込める、溜まる、狭む、強める」(「増減・補充」「伸縮」「進歩・衰退」)、「行き詰まる、曲がる、進める」(「進行・過程・経由」)がある[13]。(11)の「積む」の場合、18 個の荷物を積んだ事態を表し、(12)の「曲がる」の場合、人が角を曲がる動作を表すが、その動作には連続する時間の経過が含まれていると考えられる。

(11) ようやく十八個の荷物をカートに積み、ホテルの自動車の待つ二階に上ろうとしたがエレベーターが動かない。(PB39_00075『オン・ザ・ボーダー』2002)

(12) ようやくうちの通りに続く角を曲がった。(PB39_00707『13 ヵ月と 13 週と 13 日と満月の夜』2003)

一方、「やっと」の場合、「連れ戻す、すれ違う、追い払う」(「連れ・導き・追い・逃げ」)、「よりかかる、もたれる」(「固定・傾き・転倒など」)、「結ぶ」(「統一・組み合わせ」)、「並ぶ」(「配列・排列」)などがある。(13)の「すれ違う」の場合、車が橋を通る際、その空間的な状況を表し、(14)の「よりかかる」と(15)の「結ぶ」は、人の行為を表している。(15)の場合、四度目という表現から結ぶ行為を四回したという事態の手順も含まれているが、直接的な人の動作を含むという点で、上記の「ようやく」の事態の手順とやや異なる意味合いが生じているのではないかと思われる。

(13) 車が二台やっとすれ違えるほどの幅の橋がかかっていた。(OB1X_00145『九月の空』1978)

13 括弧の中は、意味分布の項目である。

(14) ああ、やっと壁によりかかれるぞ。(PB19_00587『発熱』2001)
(15) マクリンの手首が黒く変色しているのが目に入る。〜四度目でやっときつく結べた。(LBi9_00086『スワン・ソング』1994)

表 8「抽象的関係」の「作用」の項目

		やっと		ようやく	
意味分布		頻度	比率	頻度	比率
2.1500	作用・変化	1	0.9%	4	2.0%
2.1503	終了・中止・停止	2	1.7%	1	0.5%
2.1504	連続・反復			1	0.5%
2.1510	動き	1	0.9%		
2.1511	動揺・回転			1	0.5%
2.1513	固定・傾き・転倒など	2	1.7%		
2.1520	進行・過程・経由			3	1.5%
2.1521	移動・発着	4	3.5%	1	0.5%
2.1522	走り・飛び・流れなど	3	2.6%	1	0.5%
2.1524	通過・普及など			4	2.0%
2.1525	連れ・導き・追い・逃げ	3	2.6%		
2.1526	進退	1	0.9%	3	1.5%
2.1531	出・出し	1	0.9%	9	4.6%
2.1532	入り・入れ	5	4.3%	9	4.6%
2.1533	漏れ・吸入など			4	2.0%
2.1535	包み・覆いなど	1	0.9%	3	1.5%
2.1540	上がり・下がり	2	1.7%	5	2.5%
2.1541	乗り降り・浮き沈み			3	1.5%
2.1551	統一・組み合わせ	1	0.9%		
2.1552	分割・分裂・分散	2	1.7%	3	1.5%
2.1553	開閉・封			3	1.5%
2.1560	接近・接触・隔離	4	3.5%	4	2.0%
2.1561	当たり・打ちなど	1	0.9%		
2.1562	突き・押し・引き・すれなど			1	0.5%
2.1563	防止・妨害・回避	3	2.6%	3	1.5%
2.1570	成形・変形			1	0.5%
2.1572	破壊	1	0.9%	3	1.5%
2.1573	配列・排列	1	0.9%		
2.1580	増減・補充			3	1.5%
2.1581	伸縮			1	0.5%
2.1583	進歩・衰退			1	0.5%
小計		39	33.9%	75	38.1%

以上のように、「やっと」と共起する「特徴的な動詞」の意味分布から、「やっと」は、空間的な事態と人の具体的な振る舞いに現れる傾向があり、「ようやく」は、事態の時間的な経過と事態の順序に現われる傾向があることが明らかになった。

5. まとめと今後の課題

「やっと」「ようやく」は、語源が同じ類義語であると考えられるため、両者の違いを見出すことが難しい副詞である。本稿は、BCCWJ におけるさまざまなジャンルでの両副詞の出現傾向と「文学」という特定のジャンルにおける「会話文」と「地の文」を通し、両副詞の文体の差を明らかにした。また、「文学」に現れる両副詞と共起する

述語を、高頻度と低頻度という観点から検討し、両副詞の違いを明らかにした。

本稿は、副詞と共起する述語を検討する際、出現傾向の高い、高頻度の動詞だけに留まらず、低頻度の動詞も視野に入れ、分析対象にしたことがこれまでの研究方法と大きく異なる点である。

今回、明らかになったことは、以下のようにまとめられる。

①「やっと」と「ようやく」の大きな違いは文体の差である。「やっと」は、くだけた文章に、「ようやく」は、改まった文章に現れる傾向がある。「文学」における「会話文」には、「やっと」が「ようやく」より約4倍多く現れ、「やっと」が「ようやく」より話し言葉的である。

②両副詞と共起する高頻度の動詞の出現傾向から、両副詞は似ている事態にともに現れる類義語である。しかしながら、高頻度の「する」動詞に前接する語と低頻度の「特徴的な動詞」の意味分布は、「やっと」は、「人間活動」に、「ようやく」は、「抽象的関係」「自然現象」に現れる傾向がある。

③「やっと」は、具体的な人や物事の空間的な状況、人の行為に現れる傾向が見られ、「ようやく」は、事態の時間の経過と順序に現れる。また、「ようやく」と結びつく名詞(助詞「が」「を」などの前にくる)には、さまざまな種類の名詞がくる傾向がある。

今回は、「文学」という一つのジャンルに焦点を絞ったが、今後、BCCWJの「新聞」データではなく、大量の「新聞」データを用い、同様な方法で「やっと」「ようやく」の違いを明らかにしていきたい。

参考文献

浅川哲也(2012)「口語文における「口語」とは何か―日本語文体史と口語文法との関係―」『新國學復刊』4号　國學院大學院友学術振興会

池田英喜(2000)「「ツイニ・トウトウ」小考」『留学生センター紀要』新潟大学留学生センター

伊藤雅光(2002)『計量言語学入門』大修館書店

――――(2003)「コーパスと統計」『日本語学』4月臨時増刊号　明治書院

――――(2008)「語彙の量的構造史モデル」『日本語の研究』3巻5号　日本語学会

――――(2009)「計量語彙論から見た語彙史」『シリーズ日本語史2語彙史』岩波書店

大里泰弘(1986)「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『九大言語学研究室報告』7号　九州大学言語学研究室

金　英児 (2006)「時の副詞「やっと」・「ようやく」の意味・用法」『国文論藻』No.5　京都女子大学

工藤　浩(1985)「日本語の文の時間表現」『言語生活』通号403　筑摩書房

国立国語研究所(編)(2004)『分類語彙表　増補改訂版』(株)大日本図書

田中章夫(1978)『国語語彙論』明治書院

田野村忠温(2012)「日本語コーパスと複文の研究―BCCWJの特性と利用の方法 - 」『シ

ンポジウム複文構文の意味の研究　発表論文集』国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」
趙　恩英(2012)「類義語「急に」「突然」の違いについてー『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と新聞コーパスを資料として―『日本文化學報』第54輯　韓國日本文化學會
仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
濱田　敦(1984)「「やうやう」から「やっと」へー語の意味の変化の一例としてー」『日本語の史的研究』臨川書店
林　四郎(1971)「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究Ⅲ』(国立国語研究所報告39)秀英出版
宮内佐夜香(2012)「接続助詞とジャンル別文体的特徴の関連についてー『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として」『国立国語研究所論集』第3号　国立国語研究所
山下達雄(1998)「日本語形態素解析システム茶筌」『情報処理学会研究会報告』98-NL-125
ルチラ　パリハワダナ(2005)「長時間経過の末の予見の実現を表す副詞「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」について」『金沢大学留学生センター紀要』第8号　金沢大学留学生センター

参考辞典

グループ・ジャマシイ(編)(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
『国語学大辞典』(1980) 東京堂出版
『日本国語大辞典　第二版』(2001) 小学館

付記

本稿は、韓國日本文化學會第43回國際學術大會で口頭発表したものを大幅に修正・加筆したものである。口頭発表の際、貴重なアドバイスを下さった先生々に御礼を申し上げる。また、本誌投稿にあたり御指導下さった長谷川守寿先生と浅川哲也先生に御礼を申し上げる。最後に、論文の問題点・修正点について御指摘くださった査読の方々に御礼を申し上げる。

（ちょ　うにょん・首都大学東京客員研究員）